

もくじ

大東京の名所 戦前の国仮指定「史蹟」大鷲神社…P1

お化け煙突60年追録③現場実習…P3 写真で読むアダチの光景 足立市場専用線…P4

足立史談

第685号

2025年3月15日

足立区立郷土博物館内

足立史談編集部

〒120-0001

東京都足立区大谷田 5-20-1

TEL 03-3620-9393

FAX 03-5697-6562



【図1】初詣でにぎわう大鷲神社のようす

大東京の名所 戦前の国仮指定「史蹟」大鷲神社 多田文夫

一 文化財の宝庫 大鷲神社

足立区北部の花畑に鎮座する大鷲神社は、正月の初詣や、七月の獅子舞、十一月の酉の市などでは境内が参拝客で埋め尽くされます。そして歴史を背景に、貴重な古

建築や彫刻、伝統芸能であるお囃子、獅子舞など数多くの文化財が伝わる神社として知られています。

この名社は戦前、足立区域で初めて国の「史蹟」に「仮指定」にされました。区内で有名な「荒川堤桜」が「名勝」となるより早い、区内最初の事例でした。

※「史蹟」や「名勝」は、それぞれ当時の法律（後述）の用語で、歴史または自然景観が特に優れている場所を指します。

■大東京の史蹟 大鷲神社がどのような史蹟として紹介されているのかを昭和八年（一九三三）発行の『大東京写

真案内』（博文館）から紹介しましょう。足立区の記事に次の記載があります。

…大鷲神社がある。祭神は日本武尊で、古来武将の信心が深かった神社。仮指定史蹟の一つである。

（一部原文を補遺）

仮指定史蹟であることの説明に祭神の日本武尊と「武将の信心」をあげています。この「武将」ですが平安時代の源義光や、江戸時代の大名・佐竹氏のことを指していると考えるのが妥当でしょう（『大鷲神社史誌』。以下「史誌」とします）。

本のタイトルに出てくる「大東京」とは昭和七年（一九三二）十月一日に東京市が十五区から三十五区に拡大しことを象徴する表現です。これにより東京府南足立郡も東京府東京市足立区になりました。この「大東京」の「大」には当時の祝意と流行が反映しており新聞や刊行物にしばしば登場します。

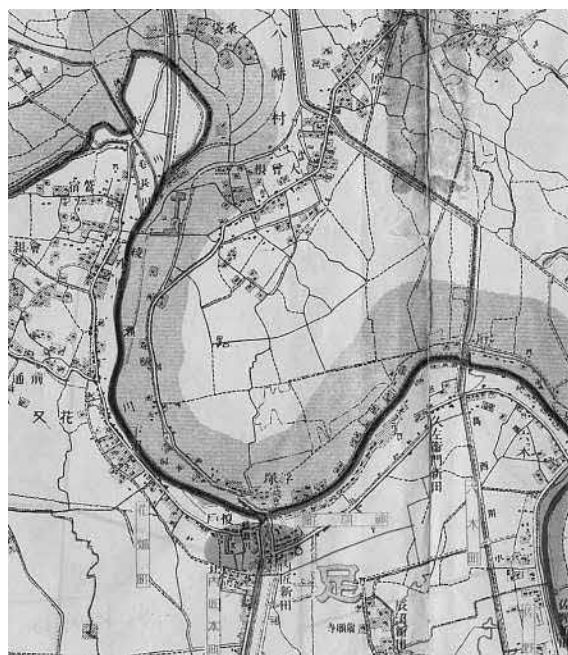
※なお当時の「史蹟」の表記として「大鳥神社」としばしば記されています。ですが、史料ですのでそのまま記しています。なお『史誌』によると「大鷲神社」の社号となったのは昭和四四年（一九六九）でした。

■仮指定史蹟 つづいて国の「仮指定史蹟」について『東京府勢概要』から紹介します。史蹟は各省大臣や地方長官（府知事や県知事ら）が指定・仮指

定を行う制度で、現在の文化財保護法や条例の前身であり法的な保護の対象になりました。

大鷲神社は東京府知事が仮指定しています。この「仮指定」とは「指定」に準じたもので、実際に保護はかられました。

大正七年（一九一八）十月二六日、東京府は「史的記念物勝地保存心得」を布告、この「心得」で「大鳥神社



上【図2 花畑の昭和7年の地図】

左【図3 同年の花畑乗合自動車路線図④】

けられました。

しかし、こうして仮指定された「史蹟」の多くは、戦後の連合国軍占領下（一九四五～五二）でGHQ民間情報教育局の方針―皇国史観、軍国主義の排除―もあり継承されず、占領下で失効し「大鳥神社」の仮指定史蹟も失効したと考えられます（多くが戦後の混乱で詳細記録が未詳）。その後、法令による保護―文化財の指定・登録―が

南足立郡花畑村、「南町奉行所址」や「乃木大将誕生地」、「八王子城址」など多くの「史蹟」の仮指定準備を行い、翌八年（一九一九）の「史蹟名勝天然記念物保存法」の施行で仮指定が行われました。仮指定された史蹟では標柱が建てられ「仮指定等の保存維持」「保存顕彰の精神」の奨励が呼びか

はかられたのは昭和五七年（一九八二年）でした。

こうした経過をみていくと大鷲神社が足立で最初の仮指定「史蹟」となった歴史は事実として記憶すべきことがらだと思えます。なぜなら仮指定史蹟は継承され文化財となっていることが多いものの、すでに失われている場合があるからです。

大東京の魅力の一つであり、国も史蹟と捉えた名社、大鷲神社は、今日に至るまで信仰の拠点であり文化財の宝庫です。社会情勢や価値観の変遷により失われることなく継承された事例として重要なことと思います。

二 昭和初期の花畑

この時代の花畑の村役場は現在の内匠橋近くの東側にありました。内匠橋には船着き場もあり、商店が並ぶ賑わいを見せる花畑村の中心部でした。昭和七年（一九三二年）の『大東京全図』を参考に、花畑の交通を概観しておきましょう。

江戸時代、大鷲神社へは、内匠橋まで江戸市中からの船が着き、そこから綾瀬川沿いを北へ歩いて参詣していました。とくに西の市には、水路、陸路合わせて多くの人が訪れました。

昭和の初めには、千住新橋南側の茶釜橋から内匠橋までの「花畑乗合自動車」というバス路線があり、江戸時代と同様に匠橋からは大鷲神社に歩いて

参詣していました。

乗合自動車（バス）は当時、足立区内でも数少ない公共のバス路線として知られていました。このことから内匠橋を起点とする花畑の賑わい、大鷲神社への人々の思いがうかがわれます。

【参考文献】

『東京府勢概要』（東京府総務部地方課、昭和十二・一九三七年）／『大鷲神社史誌』（大鷲神社、平成七・一九九五年）。／『文化財保護法五〇年史』（文化庁、平成十三・二〇〇一年）／新藤浩伸「占領期社会教育政策としての文化芸術事業の展開」（『社会教育・生涯学習研究』第二十九号所収、二〇〇四年）／佐藤明生「大正期における浦賀奉行所址の史蹟仮指定について」（『横須賀市史資料室通信』1所収、二〇一八年）

（郷土博物館芸員）

（訂正）

足立史談六八四号（令和7年2月号）

「はい、文化財係です46 武蔵千葉氏と中曽根城」一頁二段二行目

（誤）康正二年（二四五六）

（正）康正元年（二四五五）

「十二年ぶりの復活 足立二丁目の庚申祭」三頁二段・後ろ三行目

（誤）綾瀬稲荷神社

（正）西之宮稲荷神社

お詫びして訂正いたします。

*博物館ホームページ「足立史談」

PDF版では、訂正済です。

お化け煙突60年追録

③

現場実習

格和 宏典

アナログ一辺倒の千住火力発電所は筆者のようなアナログ好きには魅力ある職場で、そんな設備と付き合ってきた想い出を綴ってみたいと思います。

※文中、「〜だ・である」の常体を使用します。

■火を使わない缶焚き実習 缶を「焚いたつもり」の「つもり」実習。火を落とした4号缶で実施した。

無火缶から規定圧までの昇圧だ。ドラム内の水位の確認と補助機器の点検を行い、コールシュート内にある石炭をシュート下のコールダンパーを開けてストーカー上に落とす。

そしてダンパーを閉じ、コールシュートと一体になった前面の扉（前だれ）を開けるとストーカー上にこんもりと乗っている石炭が見える。その上に油をしみ込ませたボロ布を置く。

これから先は「つもり」だ。ストーカーを少し炉の奥に送り、「点火」したつもり。勢いよくあがる火が石炭に燃え移る。次に、地下送風機を始動するため、地下室作業員にボタンを押して始動依頼を行う。送風機からの風が石炭をさらに燃え立たせる。

さらに、コールダンパーを開け、石炭を落とし、ストーカーを始動させるとともに、コールゲートを上下させ炭

層（石炭の厚さ）を決めてゆく。水面計での水位確認、圧力計の監視など、規定書とにらめっこしながら、「やったつもり」を繰り返して、ゼロから規定の圧力まで昇圧していった。

■先輩とともに 初めての夜勤（三直）実習時「カクちゃん六号手伝え。」当直主任の指示があった。主任は、筆者を「カクちゃん」と呼ぶ。「俺の倅が覚太郎なんて呼びやすくてな」と、にこにこしながら話してくれた。

まずは、缶の水を少し抜いて、水を張る。疲れた水（缶水）の交換。次に無火缶五号の点火準備。無火缶での焚き上げ研修を思い出しながら水面計下面から二十五cm、規定通り水を張り、ストーカーへ石炭を落とし点火用ボロ布を置く。缶周りを点検して終了。翌朝点火。火が燃え盛り、順調に蒸気があがってゆく。初めての体験。忘れられないひと駒だった。

■缶をまかされた 七時三十分からの一直実習勤務。当直主任から、「五号焚いてみる。先輩は何も言わないからな。」との指示。「やったあ〜」の気持ち。

西側汽缶A室五号缶前で前直（夜勤）者と引き継ぎ完了。早速缶の点検

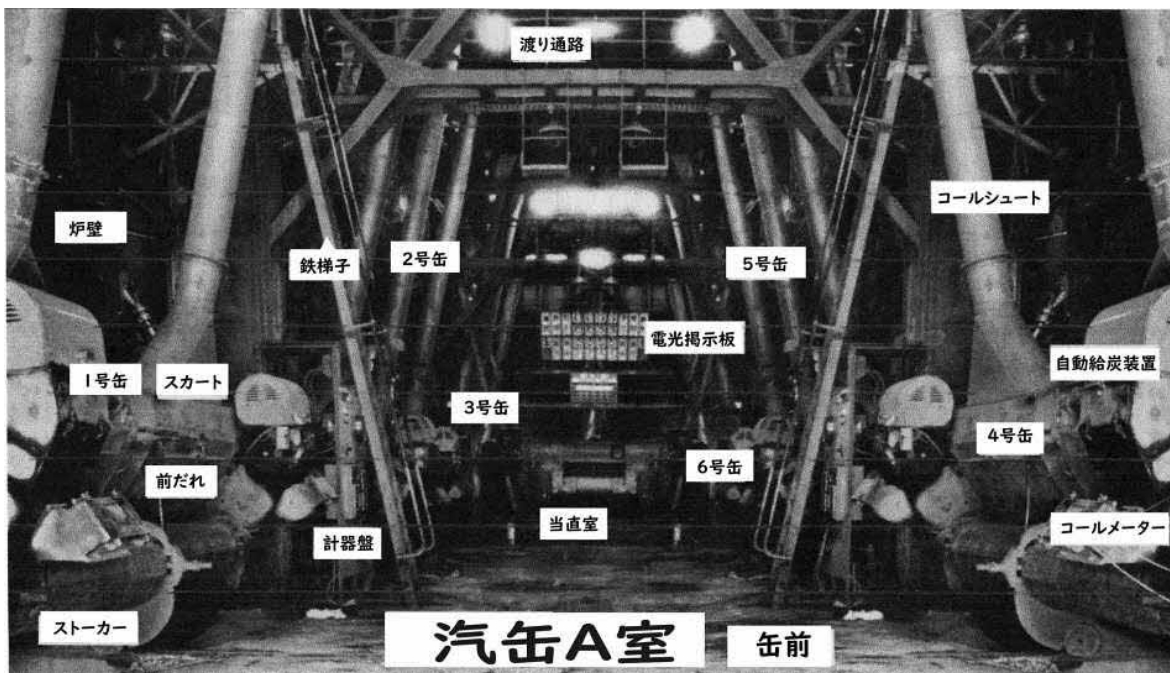
に入るが先輩は無言。大丈夫かなと不安がよぎる。現在の蒸気圧は12kg/m²（定格17・6）だが、汽機起動に必要な圧力までの上昇が遅く感じられる。

ストーカーを駆動し、送風ダンパーを1/4開とし、15・8kg/m²まで昇圧、ストーカー停止、送風ダンパー閉、そのまま圧力キープ。八時五十分、併入十分前、圧力上昇のためストーカー駆動。送風ダンパー1/4開、定格圧力に上昇。九時、一台目の発電機併入。送風ダンパー1/2開、その後3台目の発電機併入まで缶裏の点検口から燃焼状況を確認しながら炭層の調整、送風ダンパーや各種バルブの操作を行う。やがて六万kwとなり、再度炭層および汽缶周りの点検を行い一息つく。

先輩が初めて口を開き、笑顔でひと言。「完璧。」嬉しかった。

緊張がほぐれ、頭がスーと軽くなった。

（元千住火力発電所所員）



写真で読むアダチの光景
— 内田静雄氏写真から —

足立市場専用線

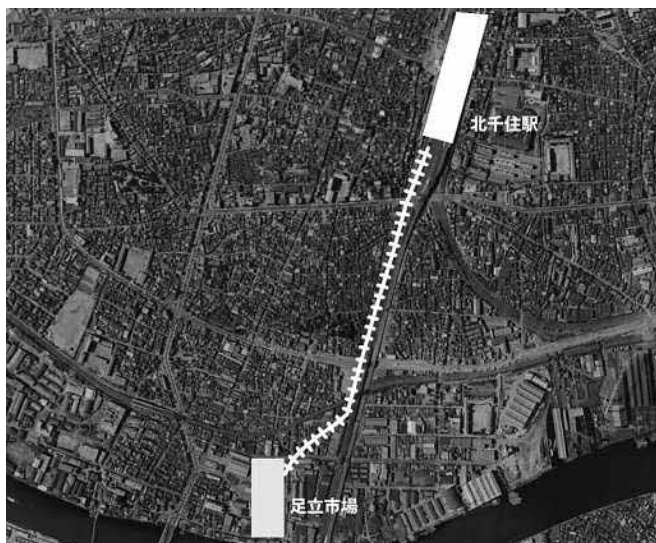
間所 瑛史

六八三号で内田静雄氏の写真について紹介しました。内田氏は鉄道にかかわる写真も多く撮影していました。なかには廃線になった路線の写真も存在します。本稿では足立市場専用線の写真を紹介します。

北千住にある足立市場の北東にゆるやかに曲がった「やっちゃば緑道」が伸びています。この遊歩道は、もとは、足立市場専用線でした。足立市場専用



【写真1】足立市場専用線



【写真2】足立市場専用線

(1960年代に撮影された国土地理院の航空写真に加筆)

線とは北千住駅から市場内まで引込線が存在していた線路で、『足立風土記稿』によると、終戦直後に作られ、貨物の輸送がおこなわれていました。『東京都中央卸売市場史』（一九六三年）によると、路線の長さは一・四八キロメートルでした。トラック輸送が中心となると役目を終え、一九七三年に廃線となりました。その後、引き込み線のあったところが区が譲り受けて、一九八一年に「やっちゃば緑道」として開設されました。内田静雄氏が専用線を撮影したのは一九七五年二月です。専用線が廃止されて二年後になります。



専用線の写真は、千住仲町や千住河原町の町並みを写したネガの中に十六点確認できます。

【写真1】は千住河原町四五付近の写真です。現在のやっちゃば緑道の入口にあたります。写真右側にある「安っさん」という店は現在も看板が確認できます。小さいですが線路上には犬がいます。列車が通らないせいかなのんびりしているようです。

【写真3】は専用線を通るトラックをローアング

ルで写したものです。洗濯物を干している家があり、線路が住宅のギリギリのところを縫うように走っていたことがうかがえます。トラックの後方には乗用車も写っており、専用線が廃止になった後は自動車の道路として利用されていたことがわかります。

足立市場専用線は戦後の流通を支えた路線でした。しかし、専用線を大きく写した写真は確認できません。内田静雄氏の写真は、廃線後ではありませんが、専用線の様子をとらえた貴重な写真です。また、周囲の風景を含めて在りし日の足立区をうかがい知ることのできる写真です。

(郷土博物館専門員)